とびよ鳴け

小川未明

青空文庫

自転車屋の店に、古自転車が、幾台も並べられてありました。タイヤは汚れて、車輪がさびていました。一つ、一つに値段がついていました。わりあいに安かったのは、もうこの先長くは、使用されないからでしょう。

原っぱで遊んでいた、辰一は、なにを思い出したか、駆け出して、自転車屋の前へきました。そして、並んでいる古い車の中の、一つにじっと目をとめていました。

「ああ、まだある。どうか、この月の末まで売れないでいてくれ。」と、心で、いったのであります。

彼は、やっと安心して、原っぱへ引き返してきました。友だちと鬼ごっこをしたり、ボールを投げたりして、しばらく遊んだのです。しかし、いつまでも遊んでいることはできなかった。夕刊を配達しなければならぬからです。

その自転車には、染め物屋の徳蔵さんが乗っていたのでした。

「あいているときは、使いな。」と、やさしい徳蔵さんは、よく辰一にいいました。辰一は、借りて、この原っぱを走りまわったことがあります。また、遠くまで乗って遊びにいったこともありました。あるときは、学校から帰って、ぼんやり往来に立っていると、うしろでふいにチリン、チリンという音がするので、驚いて振り向くと、徳蔵さんが、自転車に乗って止まっていました。

「うしろへ乗らないか。」

辰一は、喜んで、徳蔵さんの背中につかまって、荷掛けに腰をかけ、足をぶらんと下げました。

「足を気をつけな。」

さびしい田舎道の方まで、自転車を走らせて、二人は、散歩しました。徳蔵さんは、辰一にとって、実の兄さんのような気がしました。

去年の暮れ、徳蔵さんに、召集令が下りました。辰一は、空が曇って、風の吹く日に、旗を振りながら、氏神さまへ送っていったことを忘れることができません。

「万歳！　万歳！」と叫びながら、どうか、めでたく凱旋してきてください。そのときは、また

こうして迎えに出るからと、ひとりでいったのでした。

徳蔵さんが、戦死されたという知らせがとどいたのは、ほたるの出はじめる夏のころでした。そして、それがじつに悲壮なものであったことは、このほど帰還した兵士の口からくわしく伝えられたのであります。その兵隊さんは、同じ部隊で、徳蔵さんのことをよく知っていました。

出征の際は、〇〇駅から、徳蔵さんは、出発したのです。兵隊さんを乗せた汽車が通ると、国防婦人の制服を着た女たちは、線路のそばに並んで、旗を振りました。後れた女の人は、旗を振りながら、田圃道を走ってきました。また、工場の窓からは青い服の職工さんや白

いエプロンの女工さんたちが、顔を出して、ハンカチを振るもの、手を挙げるもの、遠くからこちらまでひびくように、

「万歳！　万歳！」と、叫んでいました。汽車の窓から、兵隊さんたちも、これに応えていました。中には山奥の村からきたものもありました。徳蔵さんのそばにいた兵士は、はじめて、海を見て、

「大きな河だなあ。」と、いって、驚いたそうです。

「海だ、河ではないよ。太平洋なんだ。」

徳蔵さんは、教えました。

「あっ、これが海で、太平洋か。」と、その兵士は、目をまるくして、青い波を見ていました。そのときが、口のききはじめで、徳蔵さんと、この兵士とは、その後たがいになんでも話すように親しくなりました。徳蔵さんは、細長い顔をしていましたが、その兵士は、角張った顔つきをしていました。そして、その兵士には、年老った母親があって、家を出るとき、母親は、つえをつきながら、停車場まで見送って、

「家のことは、心配しなくていいから、お国へよくご奉公するだぞ。」と、いったそうです。

兵士は、母親のいったことを思い出して、ときどき、涙ぐんでいました。

海を渡る船の中で、兵士は、

「いっしょに戦って、いっしょに死にたいものだ。」と、徳蔵さんに、いいました。もとより

温かな、誠の情けを持った徳蔵さんですから、

「ほんとうに、そうしよう。」と、いって、その兵隊さんの手を、堅く握ったのであります。

上陸すると、すぐに、彼の部隊は、前線に出動を命ぜられました。そこでは、激しい戦闘が開始された。大砲の音は山野を圧し、銃弾は、一本残さず草を飛ばして雨のごとく降り注いだ。そして、最後は、火花を散らす、突撃戦でありました。敵を散々のめにあわして潰走さしたが、こちらにも多くの死傷者を出しました。戦闘の後で、徳蔵さんは、あの兵士は、無事だったかと見て歩きました。けれど、その姿が、見つかりませんでした。

「やられたか、それとも傷を負って倒れてはいないか?」と、戦場の跡を敵の屍を越えて、探して歩きました。すると、その兵隊さんが、やぶの中に倒れているのを見いだしたのです。けれど、そのときは、すでに息が絶えかかっていました。

「おい、しっかりせい。おれだ！　いっしょに死ぬ約束をしたのに、先にいったな。よし、かならず敵を打ってやるぞ。おれも、花々しく戦って、じきに後からいくから待っていろ。」と、徳蔵さんは戦友の死体を抱き起こして、涙を落としたのです。

その後のこと、我が軍は、河をはさんで敵と対峙したのでした。その結果、敵前上陸を決行しなければならなかった。なにしろ、敵はトーチカに閉じこもり、機関銃を乱射して、頑強に抵抗するのです。ついに、決死隊が募られました。我先にと申し出たので、たちまちの間に定員に達したのです。この人たちは、全軍のために犠牲となるのを名誉と思って、喜び勇

んですぐ仕度にとりかかりました。

　このとき、蒼白い顔をして、一人の兵士が、部隊長の前へ進み出て、自分もぜひこの中に加えてくださいといったのです。それは、徳蔵さんでした。

「後から、おまえ一人を入れると、ほかのものの申し出も許さなくてはならぬ。」と部隊長は、言葉にそういいながら、いずれ劣らぬ忠勇決死の、我が兵士の精神に感心しました。だが、徳蔵さんの熱心は、その一言で翻されるものではありません。戦死した友との誓いを告げたので、ついに部隊長も許したのでした。

　決死隊が、敵に飛び入ると、敵はそれを目がけて、弾丸を集中しました。河の中ほどまで達するころには、人数が目に見えて減っていました。陸まで、もう一息というところで、無念にも弾丸を受けて、徳蔵さんは、

「天皇陛下　万歳！」と叫ぶとともに、水を紅に染めて見えなくなったのでした。

　辰一は「殉国英霊の家」と、立て札のしてある家の前を通るたびに、目に熱い涙をためて、丁寧に頭を下げました。

「どうしても、あの自転車を買うのだ。あと、一週間ばかり、売れなければいいが。」

　ある日、自転車屋の前へいってみると、その自転車が見えなかった。辰一は、びっくりして、おじさんにきいてみると、昨日売れたというのです。

「なに、あれくらいの車なら、また出ますよ。」と、なにも知らない自転車屋のおじさんは、

力を落としている辰一を見て、そういったのでありました。

その後のことです。辰一は、お友だちと、キャッチボールをやっていて、ふと戦死した徳蔵さんのことを思い出すと、急に目頭が熱くなりました。

「僕を自転車にのせて、この原っぱを走ってくれたことがあったなあ。」と、いろんなことが、心に浮かんでくるのです。

「あの自転車はだれが買ったろうか。たしか、七円と札がついていたが、惜しいことをした。お父さんが自分の働いた金で買ってもいいといったのに。」

彼の投げる球がだんだん熱を持ってくるのでした。

「辰ちゃん、すげえ球を出すなあ。」

見ている友だちまでが、目をみはって、いいました。その球を受け取る勇吉も、顔を赤くして、額に汗ばんでいました。強い球で、なかなか骨がおれるからです。

「君、いい球を出すね。しっかり勉強すると、ピッチャーになれるぜ。」

さっきから、そばで見ていた、角帽を被った学生らしい青年が、いいました。

辰一は、ほめられたので、ちょっとはずかしかったのです。

「僕ら、毎日曜の午後から××の空き地で、けいこをしているから、君もぜひやってきたまえ。そのうちにこの方面のものだけで、チームを作ろうと思っているのだ。」と、青年は、辰一にいったのであります。

辰一は、そういわれると、なにか急に明るく、力づけられたような気持ちがしました。

（ほんとうかしらん、おれは、ピッチャーになれるだろうか。）

「ありがとう。」といって、辰一は、青年に頭を下げました。そうだ、おれは、徳蔵さんのことを考えればいつだって気持ちがしゃんとして、どんないい球でも出してみせるぞと、心に叫んだのです。

十二月の日曜日でした。風のない静かなお天気であります。辰一は、午後から、××の空き地へいってみようと思いました。

「あの学生さんは、きょうも野球をやっているかな。」

自分の住む町から、だいぶそこまで離れていました。空き地へいくと、今度広い道路が通るので、多数の家屋が取りはらわれた跡でありました。

あたりを見ると、まだ半分壊されたままになって、土台のあらわれている家もあったし、すでに、一方の端では、新しく建築にかかった家もあります。見わたすかぎりの広場の中は、いろいろの風景が雑然として見られました。

こちらには、土管や、人造石が積まれているし、またあちらには、起重機が置いてありました。ところどころ木立があって、頭の上を青い空が拡がっていました。都会でこんなにはるかな地平線の見えるのは、珍しいことです。

遠い煙突からは、黒い煙が、上がっていました。ちょうど、海をいく汽船の煙のようにも思

われました。あちらでも、こちらでも、町の子供たちが、たこを上げて遊んでいます。風がないせいか、高く上がっているたこがありません。そして、工夫たちも、今日は仕事が休みなのか、地平機が投げ出されたままになっています。

「だれも、野球をやっていないが、どうしたんだろう。」と、辰一は、がっかりしたが、年末であるので、なにか都合があってこられなかったのだろうと思いました。

ここからは駅が近く、絶えず電車や、汽車の笛の音がしていました。そして、停車場のあたりは、にぎやかな町でありました。辰一は、暮れの街の景色を見物して帰ろうと思いました。

ガードをくぐると、そこだけは、一日じゅう日蔭で、寒気がきびしく、肌を刺しました。暗を照らす電燈の光は、うす濁ってぼうっとかすんでいます。出口の煉瓦の壁に、出かせぎ人夫募集のビラが貼られていました。生活のために、未知の土地へいく人のことを考えると、なんとなく、胸をしめつけられるような気がしました。

「健康であれば、どこへいっても生活ができる。」と、学校の先生のおっしゃった言葉が浮かんできました。

さすがに戦時であって、町は、いつもの暮れとちがい、べつに飾りもなくてさびしかったのです。それでも歳末の気分だけは、どこにかただよっていました。アスファルトの道を人々が忙しそうに往来しています。くつの音とげたの音が、入りまじって耳にひびきました。

露店が、連なっていました。その一つには、ヒョットコ、きつね、おかめ、などの人形が

むしろの上へ並べてありました。それを商うおばあさんは、日がほこほこと背中に当たっているので、いい気持ちで居眠りをしていました。また、この寒いのに、どこから持ってきたものか、ふな、なまず、雑魚などの生きたのを売っている男がありました。これらの川魚は、底の浅いたらいの中に、半分白い腹を見せて、呼吸をしていました。その隣では、甘ぐりを大なべで炒っていました。四つ辻のところへ出ると、雑沓の中で、千人針を頼んでいる女がありました。通る女の人々が、そのそばに足を止めていました。

「もう、お正月がくるのに、出征する兵隊さんがあるんだな。」

辰一は、感慨深く思いました。戦地へいく人のことを考えると、じっとしていられないような気がしました。

このとき、突然軍歌の声が、停車場の方にあたってきかれたのでした。彼は、はじかれたように、群衆から抜け出て、急ぎ足で、その声のする方へと向かったのです。国防婦人の制服を着た人たちが、小さな日の丸の旗を振って、調子を合わせて歌っていました。戦闘帽を被った青年が、元気いっぱいに大きな声で、音頭を取っていました。

紅いたすきをかけた、出征兵は、正しく、つつましく、立って、みんなの厚意に感謝していました。それは、徳蔵さんが、送られたときの姿を思い出させます。まったく同じでありました。徳蔵さんはこうして送られていったが、それぎり帰ってこなかったのです。

そう考えると、熱い涙が、目の中からわいてきました。いつのまにか、この人と徳蔵さんと

が、同じ人になってしまって、限りない悲壮な感じが抱かれたのであります。
辰一は、のども破れよとばかりに、大声を上げて、万歳を三たび唱えたのでした。
彼は、帰りに、もう一度空き地へ立ち寄ってみました。先刻たこを上げていた子供たちは、どこへいったか、姿が見えなかったのです。寒い風が、荒涼とした広場を吹いていました。
辰一は、支那の戦場の景色を空想しました。また戦死した徳蔵さんを思い出しました。
足もとの瓦の破片を拾い上げると、力いっぱい大空に向かって投げました。
高い、高い空に、とびが、町を見下ろしながら舞っていました。
自分が少年飛行家であったら、飛行機に乗って、ああやって敵軍を爆撃するのだ。
「とび、とび！　大きな声で鳴いてくれ！」
辰一は、胸の底からこみ上げてくる感激を、どうすることもできなくて叫びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社
　1940（昭和15）年8月
初出：「小学六年生」
　1940（昭和15）年1月
※表題は底本では、「とびよ鳴《な》け」となっています。
※初出時の表題は「鳶よ鳴け」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年10月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とびよ鳴け

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/